

与謝野鉄幹と漢詩

——『海内詩媒』の漢詩人 安藤寛——

『海内詩媒』は、大阪の漢詩人日柳三舟（政愼）主宰の浪華文会（大阪市南区北桃谷町五十七番地）が発行していた月刊の漢詩雑誌である。和装小冊子（縦二十・一センチ、横十二・三センチ）。明治十五年（一八八二）二月に『桂林餘芳』の名で桂林館から創刊、明治十七年（一八八四）九月、第二十七集以後『海内詩媒』と改題し、第三十三集までは月一回、それ以後月二回の発行（社友の投稿詩の増加による）であった。最終の明治二十八年（一八九五）十二月、第百九十集近くは隔月刊に戻っている。

鉄幹の同誌への投稿は、誌名が『桂林餘芳』から『海内詩媒』に改題された明治十七年十一月二十八日発行の第二十九集が最初で、続いて同じ日付発行の第三十集が二首目である。なお第三十集の印刷奥付には「社友三百」になったとある。

この『海内詩媒』には、鉄幹の漢詩が五十六首掲載されている。最初の第二十九集（明治十七年十一月）から第百三十集（明治二十二年六月）まで、約四年半の年月にわたって、ほとんど毎月その詩が見える。月に一首の詩作は、十一歳から十六歳という十代の少年であった鉄幹の年齢を考えると、漢学の素養と環境に恵まれていたとはいえない、かなりの時間、労力と精神的負担を伴ったのではないだろうか。

『海内詩媒』への投稿を始めた時、鉄幹は大阪住吉区遠里小野町の安養寺（住職安藤秀乗）の養子の身であった。

西村 富美子

鉄幹が漢学の基礎を積んだ歴史を、寛自身の作成した年譜によってふり返ってみるならば、明治十三年（一八八〇）七歳の時、鹿児島市の名山小学校に入学し、市内の漢学塾で学んだのに始まる。翌年（一八八一）八歳の時、同地の西本願寺主管であった父礼蔵の講筵の座に列なり、また弟子たちにも漢籍の素読を学んでいる。明治十五年（一八八二）九歳の十二月に、京都の発願寺の鈴木忍宏の養子となり、後藤某氏の漢学塾に学んでいるが、すでに五歳のときに、父母及び三人の兄から、仏典・漢籍・国書の素読、習字等の教えを受けている。以上が幼少のころに蓄積した漢学の素養の基礎であった。

しかし翌年十歳の時に父や寛自身に身上の変化があり、父は洛北一乗寺の北山御坊に隠栖し、寛は二ヶ月ほどいた養家先の鈴木家から戻るのが、四ヶ月ほど後に再び大阪住吉・遠里小野の安養寺の養子となっている。そしてすぐに堺市の河合坤庵に漢籍漢詩を学び、九月から、同市の高木秋水（名は展為）に漢籍漢詩、また敷津村祐貞寺の西本願寺学林で仏典及び漢籍を学ぶようになり、高木秋水の命名によって雅号を澄軒と称した。

翌十七年、十一歳で、師の高木秋水の推薦により、漢詩作成の進歩が著しいと認められて、大阪府下の書画会や漢詩会に招かれ作詩また揮毫する生活が三年ほど続き、漢詩人・画家・歌人の先輩たちと知り合ったのだが、その中に「海内詩媒」の主宰者、日柳三舟がいた。そ

して秋十一月に初めて投稿した漢詩が選に入り載せられたのである。

前稿すでに紹介した「秋江晚望」と題する七言絶句である。これが寛の漢詩の処女作であるが、同時に寛の生涯の全創作活動の最初のデビュー作でもあった。すなわち、以後五十年間にわたる寛の作家生活の出発点は漢詩であり、創作の原点は漢詩であった。^{注3)}

当時、寛がいかにかに漢詩の創作に熱中していたかは、寛自身の言葉によれば、「寤寐に之を忘れず、夜を徹すること屢々なり。一語も苟もするを欲せざるが故に、推敲を重ねて意に満たざれば声を挙げて泣けり。養家また貧寺にして書無きがため、あらゆる詩集と韻書とを諸方より借覽せり」という。また翌年の春までに、先の祐貞寺の経蔵に所蔵されていた仏典・漢書・国書の殆ど全てを通読してしまった。現在で言えば、小学校卒業程度の年齢であるが、漢詩の作詩のために血のにじむような努力と情熱を傾けていたことがうかがわれる。生家も養家も寺であったが、僧職を継ぐことに不本意であった十代の少年、寛の必死の自分探しの行為の表れだったのではないだろうか。

なお『海内詩媒』について少しふれておくならば、「桂林餘芳」(第一集)第二十六集・「海内詩媒」(第二十七集)第百九十集)に関しては、現時点では入手困難というより、各種図書館も所蔵している所は限られており、仮に所蔵されていても欠巻があり、完全に揃っている所は先ず無いと言う現状である。筆者も、寛の漢詩所載の「海内詩媒」については、先学の功により把握はしているが、未だに閲覧できないでいる欠巻のあることを申し述べておきたい。本稿では、寛の漢詩は未確認のものは除外したが、なお博雅の教えを乞う。

『海内詩媒』には、各詩に評語(欄外の詩の頭)・圈点(○印が字の横)・批点(傍点が字の横)が施されているが、中に誤字・誤植が幾つか見られる。また印刷の奥付の記述から、課題詩また自作の詩があること、社友は、寛が投稿を始めた時にはすでに三百人、更に四百人以上に増加したこと、詩の評語・圈点・批点は日柳三舟一人ではな

与謝野鉄幹と漢詩

く複数人(会幹)によったこと、表紙画は社友の画のうまいものが画いたこと。編輯上のミス、たとえば作者の脱落、誤記についての謝罪文を載せていること、など内部のようすが多少分かるところもあるが、主宰者・編輯人・印刷人などにも変更があったらしく、漢詩雑誌の経営運営も簡単な事業ではなかったようである。

なお寛の『海内詩媒』所載の五十六首の漢詩のすべてを載せるのは紙数に限りがあるので、本稿には十五首の詩を選び、詩題その他を最後尾に挙げておくにとどめた。

○

それでは、与謝野寛の作家活動の出発点となった「海内詩媒」所載の漢詩について順を追って述べたいと思う。

●明治十七年(一八八四)十一歳

① 秋江晚望 秋江の晩望 澄軒逸史 安藤寛

一行雁影海天秋 一行の雁影 海天の秋

水色濛々山似浮 水色濛濛として 山浮くに似たり

曉瞭遙聽漁笛響 曉瞭 遙かに聴く 漁笛の響き

蘆花州外認孤舟 芦花州外 孤舟を認む ○韻：下平十二・尤

② 晩節 晩節^{まふ} 墨仙々史 安藤寛

村々都栽菊 村々 都て菊を栽う

何處是陶家 何れの処か是れ陶家ならん

過了重陽節 重陽の節を過ぎ了るも

僧園猶看花 僧園 猶お花を見る ○韻：下平六・麻

①澄軒逸史の号は、第七十九集まで用いている。②墨仙仙史の号はこの詩のみで、菊花また僧園に関係あるか。

この鉄幹のデビュー作二首、①七言絶句、②五言絶句は、押韻・平仄等は規格どおりだが、①は全句に批点、②は後半の二句に圈点、が付されている。なお評語は後にまとめて挙げておいた。(第二十九集及び第三十集は、発行日が同じだが、誤植の恐れもある。)^{注2)} ①②とも

与謝野鉄幹と漢詩

に、中国の詩の雰囲気非常によく似ており、漢詩の第一・第二作として努力の佳作と言うべきであらうか。②は特に陶淵明を意識しているが、①②ともに、詩語から見て実景を詠んだものであろう。

●明治十八年（一八八五）十二歳

③ 歳暮感懷 歳暮の感懷 澄軒逸史 安藤寛

東流碧水送昏晨○ 東流の碧水 昏晨を送り ○韻：上平十一・真

逝者不歸來者新○ 逝者帰らず 來者新たり

千尺松高無競節 千尺の松高くして 節を競う無く

一枝梅發有先春○ 一枝の梅発きて 春に先んずる有り

④ 歳暮感懷 歳暮の感懷 澄軒逸史 安藤寛

飛雪寒風年欲暮 飛雪 寒風 年暮れなんと欲す

光陰瞥如流水過○ 光陰瞥なること 流水の過ぎるが如し

稚童喜待新春至 稚童喜びて 新春の至るを待ち

窮叟獨愁酒債多○ 窮叟独り酒債の多きを愁う ○韻：下平五・歌

③の七言絶句は押韻・平仄等は規格どおり、④の七言絶句は一句が押韻せず。平仄は規格どおりである。

③は全句に批点、④は転句に批点、結句に圈点が付されている。③

④は同じ題の詩だが、③は実際には前年の十七年十二月の作。「歳暮」

を詠んだ詩を二首ならべてみたのだが、③は格言等をまじえて、「松・

梅」などの歳暮また歳寒にふさわしい風物を用いて格調高くうたわれ

ている。④は日常生活の中での「歳暮」を描写し、大人と子供の迎春

の心境の違いを対比する。ただし結句は唐詩風の感がある。

●明治十九年（一八八六）十三歳

⑤ 又（丙戌新年） 又（丙戌の新年） 澄軒逸史 安藤寛

歡聲佳氣滿村閭○ 歡声佳気 村閭に満つ

正座朝來試筆初○ 正座して 朝來 試筆の初め

出谷黃鶯尋舊宿 谷を出でて 黄鶯 旧宿を尋ね

賀年騷客駐高車○ 年を賀す騷客 高車を駐む

雪消屋角梅花笑 雪消えて 屋角に梅花笑い

日暖門前柳葉舒○ 日暖かくして 門前に柳葉舒ぶ

紅旭三竿祥露裡 紅旭の三竿 祥露の裡

春風先到野人廬○ 春風先ず到る 野人の廬 ○韻：上平六・魚

⑥ 同（山秀水靈丙集） 瓜生野 澄軒逸史 安藤寛

同 瓜生野 攝津遠里小野人

正平年間 小楠公 正平年間 小楠公

寡兵能破數萬敵○ 寡兵 能く数万の敵を破る

我村則是瓜生村 我が村は則ち瓜生村

々中于今有遺迹○ 村中 今において遺迹有り

境幽地僻乾坤別▲ 境は幽 地は僻にして 乾坤別る

我住此間結茅屋△ 我 此の間に住みて茅屋を結ぶ

長日消來琴棋書 長日消來す 琴棋の書

一庭栽得梧桐竹△ 一庭栽え得たり 梧桐 竹

北接墨江南和水 北は墨江 南は和水に接す

藤蘿紆垣松傍門□ 藤蘿 垣に紆わり 松 門に傍う

淡島西横夕陽閃 淡島は西に横たわり 夕陽閃き

葛山東聳翠入軒□ 葛山は東に聳え 翠は軒に入る

四面風光四時好 四面の風光 四時好く

日坐窓底動詩情◇ 日び窓底に坐して 詩情動く

人煙都是二百戶 人煙 都べて是れ二百戸

人々抱義主忠誠◇ 人々 義を抱き 忠誠を主とす

口甘蔬菜常健康▼ 口に蔬菜甘く 常に健康なるも

家爲水旱幾盛衰▼ 家は水旱の為に幾たびか盛衰す

婦女縑車夫耕地 婦女は車を縑り 夫は地を耕す

各作強兵富國基▽ 各おの強兵富國の基と作る

（注：余村往昔稱瓜生、小楠公之陣跡也。于今楠公及小楠公之遺物

多存極樂寺。村中婦女、皆業縑車。句中故及之。

余が村、往昔瓜生と称し、小楠公の陣の跡なり。今に于いて楠公及び小楠公の遺物多く極楽寺に存す。村中の婦女皆な縲車を業とす。句中故に之に及ぶ。

韻：○入声十二・錫、◎入声十一・陌、▲入声九・屑、△入声一・屋、□上平十三・元、◇下平八・庚、▼下平七・陽、▽上平四・支。
⑤の七言律詩は押韻・平仄等は規格どおりだが、頷聯・頸聯に批点が付されている。⑥の七言古詩は転韻（五回）、七・八・十九句に批点、十六・二十句に圈点が付されている。

この年の第五十七集（三月二十五日発行）から、住居を記すようになったが、すでに四月には養家の安藤家を脱出し、岡山の国富村禅光寺安住院の住職、長兄和田大円のもとに身を寄せていた。

⑤は新春の風景をうたう。一・二句は村の賑わいと書き初め、三・四句は鶯の訪れと年賀客の訪れ、五・六句は雪間の梅と柳葉の芽吹き、後聯は真紅の初日の出と春風。新春にふさわしい風景の描写だが、実景か否か整いすぎの感がある。⑥は養家安藤家のある瓜生野（遠里小野）の楠正行・正成にまつわる歴史を詠んでおり、義と忠誠を信条とした村人たちの男女の現在に至る生活を述べる物語詩である。晩年の寛はこの五言古詩を得意とした。^{（注）}

●明治二十年（一八八七）十四歳

⑦ 呈贈山先生 次其韵

山氣籠窓暮靄青○ 山氣 窓に籠もりて 暮靄青く
清流遶屋夢清靈○ 清流 屋を遶りて 清靈を夢む
先生幽興尤堪羨 先生の幽興 尤も羨むに堪え
夜々醉眠斯好亭○ 夜々 醉眠 斯好き亭 ○韻：下平九・青

⑧ 西瓜 西瓜 澄軒小史 安藤寛 攝津遠里小野人

連日村々暑炎酷 連日 村村 暑炎酷にして

与謝野鉄幹と漢詩

西瓜嚼了豁胸襟○ 西瓜を嚼み了りて 胸襟を開く
前身恐是忠臣化 前身 恐らくは是れ忠臣の化

大腹由来赤心○ 大腹由来赤心充つならん ○韻：下平十二・侵
⑦の七言絶句は押韻・平仄等は規格どおりで、起句に圈点、承句に批点が付されている。⑧の七言絶句は起句に押韻しないが、平仄は規格どおりで、転句に批点、結句に圈点が付されている。

「胆山先生」は、生駒章氏。大阪の和泉北村の住人で、「海内詩媒」の社友。ただしこの詩の原詩、胆山の詩は未見。⑧の西瓜の詩は、実にユーモアに溢れており、写実的である。西瓜を太鼓腹・赤心、忠臣は「後漢書」光武紀の「赤心を推して人の腹中に置く」をそのまま用いている。「藍面・赤心、塗炭の熱を救う。果たして是れ忠臣の化なり」の評語がある。

この年の九月から、寛は「撰津人、備前に寓す」と記すようになるが、岡山中学の入試の失敗は漢詩の作詩熱中が原因だと考え、漢詩作りを抑制し始めた。十一月に京都の父礼蔵のもとに帰り、国書を濫読、翻訳書を読み、父の門弟とともに漢詩への情熱を長短歌作成に移すようになった。それは生涯情熱を傾けた歌人人生の始まりでもあった。

ただし、精神的に徐々に漢詩離れはしたが、依然として実作は続けられており、翌年もまた翌々年も「海内詩媒」への月に一首の投稿詩のペースに変化は見られない。またこの年にはすでに備前岡山に居住していたが、八月までは「撰津遠里小野人」と記しており、九月二十五日発行の同誌に掲載の詩から「撰津人寓備前」と記し、署名も「鐵（鉄）雷道人 安藤寛」と記すようになった。ただしこの年の「安藤寛」に冠せた署名は、澄軒逸史、澄軒小柄、澄軒小裡などさまざまである。

●明治二十一年（一八八五）十五歳

⑨ 送蓮溪詞伯歸于故山 二首一 鍊雷道人 安藤寛 攝津人寓岡山
蓮溪詞伯の故山に帰るを送る 二首の一

与謝野鉄幹と漢詩

東備有偉人 東備に偉人有り

○韻：上声四・紙

由来明事理○ 由来 事理明らかなり

不關塵世譚 塵世の噂に關わらず

恰與臥龍似○ 恰も臥龍に似たり

詩君他日得雲煙 詩君 他日 雲煙を得て

奮然躍出清池裡○ 奮然として 清池の裡に躍り出でん

⑩ 書從遠友來時在東備瓶井山 鐵雷道人 安藤寛

書遠友從り來たる。時に東備の瓶井山に在り 攝津人寓備前

遠友贈書情太厚 遠友書を贈りて情太だ厚く

梅花箋上墨痕薰○ 梅花箋上 墨痕薰る

報云今歲風殊暖 報じて云う 今歲 風殊に暖かく

春入溪山已七分○ 春溪山に入りて已に七分 ○韻：上平十二・文

⑪ 寄蓮溪詞伯伏乞次韵 鐵雷道人 安藤寛

蓮溪詞伯に寄せ、伏して次韻を乞う 攝津人寓備前

別離將半歲 別離 將に半歲ならんとす

夜々夢相牽○ 夜々 夢みて相牽かる

詩思君無恙 詩思 君 恙無く

病痾吾未痊○ 病痾 吾れ未だ痊えず

啼鴿古寺雨 啼鴿 古寺の雨

垂柳長隄煙○ 垂柳 長隄の煙

此際吟資足 此の際 吟資足るも

可空窓底眠○ 空しく窓底に眠る可し

○韻：下平一・先

⑫ 奉父途上作 鐵雷道人 安藤寛

父を奉じて途上の作 寓西京一乘寺村

侍父欲探勝 父に侍し探勝せんと欲して

手携酒一瓢○ 手に酒一瓢を携う

過來松竹村 松竹の村を過ぎ來たり

穿入稻花路○ 稻花の路に穿ち入る

池邊數魚遊 池辺 數魚遊び

林間聽鳥呼○ 林間 鳥の呼ぶを聴く

山店煖酒斟 山店 酒を煖めて斟み

野水倩舟渡○ 野水 舟を倩いて渡る

古寺拜觀音 古寺に觀音を拝し

村園看楓樹○ 村園に楓樹を見る

脚倦憩路傍 脚倦れて路傍に憩い

憩了亦相步○ 憩了りて亦た相歩む

至處佳景多 至る處 佳景多きに

憾我無佳句○ 我に佳句無きを憾む

○韻：去声七・遇

⑨は五言四句・七言二句の三韻詩。一韻到底だが、所謂規格型の近

体詩の形式ではない。圈点が末句に付されている。⑩の七言絶句は一

句に押韻しないが、平仄は規格どおりである。転句に批点、結句に圈

点が付されている。⑪の五言律詩の押韻は規格どおりだが、領聯の平

仄にかなりの乱れはあるが領聯に批点、頸聯に圈点が付されており平

仄の乱れに關して評語は言及していない。⑫の五言古詩は転韻一回で、

後は「遇」の韻で通している。三・四句に圈点、五句は上三字、六句

は下三字に、七・八句に批点が付されている。

⑨⑩⑪は、備前岡山での作であり、⑨⑪は蓮溪詞伯に贈る詩、⑩の

友は不明だが、「瓶井山」つまり寛が長兄大田の禅光寺安住院にいた

時である。蓮溪詞伯は備前岡山虫明（瀬戸内市邑久町虫明）の人、社

友であり、蓮溪居士・蓮溪道人とも言い、本名は黒井寛。翌年の⑬の

詩題にも名が見える。詩の内容から察するに、詩人また人間としても

尊敬しており、⑨の詩には「臥龍」（諸葛孔明）に例えている。

この年も京都一乘寺の父母のもとにいたが、十月発行の同誌（百十

八集）までは、「鐵雷道人 安藤寛 攝津人寓備前」を用いており、

十一月発行の⑨に挙げた詩から、号・署名の後に当時の事実上の住居

「西京一乘寺人」を記している。⑫の詩は京都一乘寺の父のもとにあつ

て、この年の秋に父の供をして散策に出かけた途上の作。中途の転韻は意味する所があるかも知れない。

またかつての岡山中学入試失敗に続いて、同志社への入学も学資が無く実現しなかった。以後諸々の学校への入学を試みたが実現せず、寛が受けた学校教育は小学校で終わることになった。寛は、漢詩においては古詩こそ大詩人の条件との見解を持ち、和歌も長短歌の制作を心がけ、万葉、記紀歌謡、仏足跡歌を愛読するが満足せず、漢魏唐宋の詩集を博渉したという。

この時期も、寛の心は和歌と漢詩の間でゆれ動いていたが、「海内詩媒」への漢詩の投稿は、やはり今までと変化は見られなかった。

●明治二十二年（一八八九）十六歳

⑬ 巳丑新正

巳丑の新正

鐵雷道人

安藤寛

小杯徐酌屠蘇酒

小杯徐ろに酌む屠蘇の酒

○韻：上平十一・真

微醉覺來吟意伸

微酔 覺め來たりて 吟意伸ぶ

豈歎門前無賀客

豈に門前に賀客の無きを嘆かんや

偏歡堂上在慈親

偏えに堂上に慈親在るを歡ぶ

老梅笑雪香魂健

老梅 雪に笑いて 香魂健やかに

稚柳舞風姿態新

稚柳 風に舞いて 姿態新たなり

誰謂山村春未到

誰か謂う 山村に春未だ到らざると

吾家已有十分春

吾が家 已に十分の春有り ※己↓巳

⑭ 荅黒井蓮溪及岡山諸友問近況伏乞次韵三首之一

黒井蓮溪及び岡山の諸友近況を問うに答う

伏して次韻を乞う 三首の一

鐵雷道人

安藤寛

寓西京一乗寺

寄友詩須陳實意

友に寄せるの詩は須く実意を陳ぶ

豈求虚飾句調工

豈に虚飾し句に調工を求めんや

畦頭摘菜携稚妹

畦頭に菜を摘むに 稚妹を携え

与謝野鉄幹と漢詩

爐畔煎茶伴父翁 ○ 炉畔に茶を煮て 父翁を伴う
相恩情從病中切 相思 情 病中に從いて切に

※恩↓思？

遠遊志到酒邊空 ○

遠遊 志到りて 酒辺空し

同床分韵其何日 ○

床を同じくし韻を分かつは其れ何れの日ならん

鐵路山陽全未通 ○

鐵路 山陽全く未だ通ぜず ○韻：上平一・東

⑮ 淡婆姑

淡婆姑

鐵雷道人

安藤寛

西京一乗寺人

淡泊由來勝酒卮 ○

淡泊 由來 酒卮に勝る

喫終心覺宿愁披 ○

喫し終わりて 心 宿愁を披くを覺ゆ

佳人閨裡眠醒處 ○

佳人 閨裡 眠りより醒むる処

野客爐邊談熟時 ○

野客 炉辺 談熟す時

幽味奇香所吾嗜 ○

幽味 奇香 吾が嗜む所

狂顛痴癖任佗嗤 ○

狂顛 痴癖 佗の嗤うに任す

常携銀管長三尺 ○

常に銀管長さ三尺を携え

吐出條々五彩絲 ○

条条たる五彩の糸を吐出す ○韻：上平四・支

⑯ の七言律詩は一句に押韻しないが、平仄は規格どおりで、三句、

頸聯に圈点、四句・八句に批点が付されている。⑭の七言律詩も一句

には押韻しない。頷聯・頸聯に平仄の乱れがある。（ただし三句は対

語によるものか、五句の「恩」（思）は誤植か？。一句及び頸聯に圈

点が付されている。⑮の七言律詩は押韻・平仄ともに規格どおりであ

り、一句、八句に批点、頷聯に圈点が付されている。

⑬は新春の詩だが、前の⑤に比べて三年の隔たりがあり、前者は恐

らく養家安藤家で、後者は京都一乗寺の両親のもとで迎えた新年であ

る。「吾が家已に十分の春あり」はその意も含めてのことであろうか。

⑭は先の蓮溪伯詞に近況を報じたもので、後聯の「床を同じくし韻を

分かつは何れの日ならん、鐵路山陽全く未だ通ぜず」の兩句には蓮溪

への思慕の心情が伝わる。先の⑨⑩の詩とあわせ黒井寛・蓮溪に対す

る親愛敬愛の思いが感じられる詩の内容である。

⑮は、「たばこ」の詩である。寛がヘビースモーカーであったかどうかは寡聞にして知り得ないが、他にも「愛煙」の詩を詠んでいる。

「たばこ」はポルトガル語で、一般的には「煙草」「煙」「烟」の字を宛てる。「淡婆姑」は意味深長な宛字であろうが、また「たばこ」を題にした詩も珍しいのではなからうか。「たばこは酒にまさる価値があり、喫したあとは精神的にたまっていた愁いが抜けていく」の一・二句は喫煙者の共感を呼ぶ句であろう。また後聯は、「三尺の銀の煙管をいつも携帯し、条条と五彩のたばこの煙をくゆらせる」は、煙管をくわえてたばこをふかす喫煙の状の巧みな写實的描写である。

この年、父の命により西本願寺で得度するが、四月に次兄赤松照幢經營の山口県徳山町にあった徳山女学校の国語漢文教員になり、以後二年間「積善会雑誌」（次兄発行）の編集に携わった。また古典文学への興味と同時に次兄の漢詩に和する漢詩も作った、という。

この年が、「海内詩媒」への投稿の最期の年であり、六月十二日付け（百三十四集）が最終稿である。一月から六月までの投稿詩のペー
ス
ス
スは同じだが、以後明治二十八年十二月（百九十集）まで発行された「海内詩媒」には寛の詩は全く見えず、残念ながら投稿中止の理由も不明である。

○

『海内詩媒』に投稿していた（十一歳から十六歳）のは、与謝野寛また鉄幹ではなくて、漢詩人安藤寛であった。十歳の六月に生家の寺の貧困により大阪遠里小野の安養寺の養子となり、十八歳の六月に実家の与謝野家に復籍するまでの八年間は、安藤姓であった。養家には三年ほどで、十三歳の四月には岡山県瓶井山の禅光寺安住院の住職であった長兄のもとに脱出し、再び大阪の養家に帰ることはなかった。

十四歳の十一月には一乗寺に居住する父のもとに帰るが、十六歳の四月に山口県徳山の徳心寺の次兄赤松照幢のもとに行き、次兄の経営する徳山女学校で国語漢文の教員を勤め、十八歳の六月に与謝野姓に

戻り、十九歳の三月には辞職して京都に帰った。

以後、上京して生涯の師と仰ぐ落合直文の門下生となり、漢詩の世界からは離脱の道を歩むことになる。

寛の十歳からの人生は、大阪遠里小野で三年、岡山禅光寺で一年半、京都一乗寺で一年半、山口徳山で三年、という各地流転の生活であり、生時からの不運はそのまま続いていた。住居を転々としてつづ養家の姓を名乗り続けながら漢詩の詩作と投稿の生活。これが『海内詩媒』の漢詩人寛の実体であった。『海内詩媒』で用いた、澄軒逸史、墨仙仙史、澄軒小柄、澄軒小史、鐵（鏡）雷同人、等の各種の号、住居の摂津遠里小野人、西京一乗寺人、摂津人寓備前など、一貫した安藤寛の名字等を考え合わせると、一見微細に見える事がらも当時の寛の複雑な心境を推測する材料になりうるように思う。

寛が『海内詩媒』に投稿した詩は総数五十六首、大阪遠里小野や京都一乗寺在住の時は恐らく日柳三舟の主催する「浪華文会」に直接参加していたであろうが、岡山での作は投稿による参加であったと思われる。初期の遠里小野在住の時の詩は懸命の力作ながら、概して漢詩習作の時期の感を免れない。岡山また岡山に関する作は量また質の面から見て、五十六首の中では評価に値するものを作詩している。瓶井山禅光寺、また本城梅翁、蓮溪詞伯などとの交流など、わずか一年半であったが精神的に充実していたことを感じさせる。

作詩の地を推定できない詩も多いが、⑥「瓜生野（遠里小野）」、⑫「奉父途上作」などには歴史や肉親を詠んだ古詩の興趣があり、⑬「西瓜」、⑮「淡婆姑」などには日常周辺のを題材にしたユーモア溢れる即興詩と言えよう。

寛の十代の漢詩、『海内詩媒』投稿の詩は、歌人と謝野寛また与謝野鉄幹とは一線を画する作品であり、後の歌人鉄幹の文学活動の前哨戰的な成果として一つの評価を与えることができるのではないかと、筆者は考えている。

〔注〕

(1)『海内詩媒』の体裁について、広田栄太郎氏は「縦五〇センチ、横一二・五センチ」と記し、以後、逸見氏もそれを踏襲するが、何かの間違ひではなからうか。

(2)広田氏は、「十二月」の間違ひとするが、詳細は不詳。

(3)湯浅光雄「寛先生少年時代の漢詩」、谷林博「与謝野鉄幹の初期作品をめぐる」にも、この事にふれている。

(4)本稿で引用した、②及び③の詩は、芳村弘道氏所蔵本により確認させていただいた。

(5)後に挙げた評語⑪を参照。

(6)五句の「相恩」の語は「相思」の誤植だろう。詩語また「遠遊」の対語としても、「相恩」より「相思」の方が適している。また平仄も合致する。

(7)「積善會雜誌」第十一号に(明治二十二年四月三十日発行)に、寛の漢詩が見えるが、この詩はすでに「海内詩媒」第百二十二集(明治二十一年七月十二日発行)所載の詩で、詩題は「題輕漾集次學鷗詞兄之原韻」(字の異同がある)。「學鷗詞兄」は北海道札幌の人、姓は松田。当時静岡に居住。

(8)奥野信太郎氏は、鉄幹の漢詩を絶賛しているが(恐らく晩年の作)、特に五言古詩と五言律詩に長じ、漢詩は歌への精進の一つであったという。田山花袋や夏目漱石より高く評価する。

【評語】

- ① 趙倚樓自り脱化。
- ② 所謂未だ必ずしも秋香一夜に衰えず。
- ③ 歳寒の操節、之の中に隠然たり。
- ④ 後半、字対せずして、句は則ち対す。
- ⑤ 春風至る。公なること朝野の別無し。
- ⑥ 結末、起手中段の人々抱義の句に応ず。蓋し是れ当年流風遺俗な

与謝野鉄幹と漢詩

り。

⑦ 青の字、押来して、原作に譲らず。

⑧ 藍面・赤心、塗炭の熱を救う。果して是れ忠臣の化なり。

⑨ 蓮溪居士、近ごろ我が社に入る。其の作は格調自ら高し。此の餞辞に負かず。

⑩ 余亦た曾て、曉窓臥して桜花の曆をするに、春東山に入りて已に十分、の句有り。此れ結末命意相似たり。

⑪ 後聯新尖にして、中に自佗相思の意を含むこと妙。

⑫ 東民吟士に詩有りて云う、寒暄適肌の日、母を奉じて春晴を歩む。野外に梅を探して去き、溪上に芹を摘みて行く。忽ち橋の独(?)水に遇い、先ず過りて欽傾を試みる。此の作と共に是れ孝士の詩、余も也た斃々として風樹の歎を禁ぜず。

⑬ 後聯及結末、第四句の意を承く。一門の和氣霽然見るが如し。而して舞字は特に出処有るも亦た妙なり。

⑭ 起手已に実意を見る。故に二聯共に是れ実一点の虚飾無し。三百篇の意、只だ思い邪無しの三字在り。古人亦た曰う、詩は思い此くの如くにして、始めて詩と謂う可きなり。

⑮ 淡の字虚ならず。下前聯能く煙味真境を尽くす。結末亦た金糸煙化して此の色糸と為るの文。

〔参考文献〕

- ◎日柳三舟編『海内詩媒』(日本近代文学館蔵他。欠巻有)
- ◎与謝野光編『与謝野寛年譜』明治書院 昭和一〇年五月
- ◎逸見久美『評伝・与謝野鉄幹晶子』八木書店 昭和五〇年四月
- ◎河野鉄南『与謝野寛の思出』「立命館文学」二ノ九 昭和一〇年九月
- ◎湯浅光雄「寛先生少年時代の漢詩」『冬柏』八巻七号(昭和十二年七月)
- ◎湯浅光雄「澄軒逸詩」『冬柏』十巻五号(昭和十四年五月)

与謝野鉄幹と漢詩

◎広田栄太郎「楽しみて淫す―最近の集書ノートから」 「日本古書通信」二十 一巻八号 昭和三十一年八月

◎奥野信太郎「与謝野先生の漢詩」 「群像」十一巻十号 昭和三十一年一〇月

◎谷林博「与謝野鉄幹の初期作品をめぐって」 「日本文学」十二巻

七号 昭和 三八年七月

◎広田栄太郎「鉄幹と『海内詩媒』―解説と資料―」 「大妻国文」第三号 昭和 四七年三月

◎三浦叶「『明星』・鉄幹（寛）・晶子と漢文学」 「就実語文」十三号 一九九 二年

三十一集

【海内詩媒所載・鉄幹漢詩】詩題

◎明治十七年（一八八四）十一歳……二首

●秋江晚望

●晩節

◎明治十八年（一八八五）十二歳……一〇首

●歳暮感懷

○春日早起

○歸途口占

○晩眺

○歸途口占

○晩歩

○煮茶待客

○江村夜歸

○秋日閑居

●歳暮感懷

◎明治十九年（一八八六）十三歳……一四首

●又（丙戌新年）

○村居

○首春山村

○春日幽居

○春日歸家

○初夏閑居

澄軒逸史 安藤寛
墨仙々史 々

澄軒逸史 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

々 々

二十九集 十一月二十八日 一
三十集 十一月二十八日 二

三十一集 一月二十八日 三

三十三集 三月二十五日 四

三十六集 五月十二日 五

三十八集 六月十二日 六

四十集 七月十二日 七

四十二集 八月十二日 八

四十五集 九月二十五日 九

四十七集 十月二十五日 一〇

四十九集 十一月二十五日 一一

五十一集 十二月二十五日 一二

五十二集 一月十二日 一三

五十三集 一月二十五日 一四

五十五集 二月二十五日 一五

五十七集 三月二十五日 一六

五十九集 四月二十五日 一七

六十一集 五月二十五日 一八

住吉人 々
攝津遠里小野人 々

与謝野鉄幹と漢詩

○題輕漾集次學鷗詞兄之原韵

○驟雨

○夜坐憶舊遊

○送吉田良吉氏之朝鮮

●奉父途上作

○去岡山前日題積翠亭

◎明治二十二年（一八八九）十六歳……六首

●已丑新正

●荅黒井蓮溪及岡山諸友問近況伏乞次韵三首之一

○梅花書屋図 本社課題

●淡婆姑

○瓶井山雜詠之一

○瓶井山雜詠之一

々	鉄雷道人	々	々	西京一乗寺人	百二十四集	一月十二日	五一	④
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	寓西京一乗寺	百二十六集	二月十二日	五二	④
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	西京一乗寺人	百二十八集	三月十二日	五三	②
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	々	百二十九集	三月二十五日	五四	④
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	攝津遠里小野人	百三十集	四月十二日	五五	②
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	・	百三十四集	六月十二日	五六	①
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	西京一乗寺村人	百二十二集	十二月十二日	五〇	②
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	寓西京一乗寺村	百二十集	十一月十二日	四九	⑤
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	々	百十八集	十月十二日	四八	③
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	々	百十六集	九月十二日	四七	⑥
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	々	百十四集	八月十二日	四六	③
・	・	・	・	・	・	・	・	・
々	鉄雷道人	々	々	々	百十二集	七月十二日	四五	⑥

○詩題 ○署名（号・名字・住居） ○所載号 ○発行日付 ○番号 ○詩型（①五言絶句。②七言絶句。③五言律詩。④七言律詩。⑤五言古詩。

⑥七言古詩。⑦三韻詩）、の順で記した。

※ア安堂寛。イ遠里小路人。ウ安藤貫。エ安藤貫。オ攝津人寓備前。

●は、筆者が本文中に引用した詩。

（四天王寺大学客員教授）